

令和4年度 学校関係者評価書

鈴鹿市立栄小学校			
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上	<p>①授業改善に取り組む。 【指標】学調・みえスタディ・チェックの結果分析で明らかになった課題に全学年で重点的に取り組む。 【目標値】課題となった問題の正答率を上げる。</p> <p>②授業力を向上させる。 【指標】公開授業を行い、意見交換をして授業力を高める。 【目標値】全教職員が公開授業を行う。</p> <p>③読書活動を推進する。 【指標】図書館利用を活性化させる。 【目標値】年間貸出数5000冊</p>	<p>・学力向上に取り組む姿勢はみられてはいるが、成果としては時間がかかる問題だと思います。今後も継続してください。 ・県外の学力上位校がしていることや違いを明確にするという作業も必要。 ・一人一人が効率よく学ぶ部分とみんなで話し合って深める部分の両方が充実すると良い。 ・個人の興味の度合いにより、授業への姿勢が違ってくるので、興味の弱い子が意欲を持てるようにする。 ・板書を丁寧に書く時間をとったり、なるべく一定ルールでの発言や進行の妨げをさせない等の工夫が必要。 ・算数の文章問題はその場面の想像力を働かせるため、国語の物語風な解説が必要と常々思う。 ・公開授業(授業参観も含め)、先生方の交流、他学年の枠を超えた意見交換の場を多くとっていきとよい。 ・図書館の利用状況は年間貸出数5000冊の目標に達しなかったが、休み時間などに図書館を利用し、たくさんを本読んでいると聞くので活性化されていると思う。 ・読書活動はずい分進んでいると思う。読んだ本から感想を広く活用し、みんなで共感できるようにして欲しい。 ・季節に合わせた壁面等の工夫も楽しみに子供たちは図書館へ向かっている。</p>	<p>・今後も児童の実態把握に努め、読解力や書く力など課題改善のための授業改善に取り組んでいきたい。そのためにそれぞれの取組や意見を交流したり、授業規律や学習のルールを統一して指導したり、板書や授業形態、ICTの活用などの研修を行ったりしていきたい。 ・図書の出冊数は年度末には目標貸出数をこえることができた。図書巡回指導員や読み聞かせボランティアさんを今後も活用して読む楽しさを感じたり、読む習慣を身につけるようにしていきたい。</p>
	<p>(成果と課題) ・学調、みえスタディ・チェックの結果から、記述の正答率が上がったが、無回答が少なくなったりしてきたが、全体としての正解率は県平均より低いものもあり、読解力の弱さや条件をつけて書く力、引用する力の育成が課題である。 ・全教職員が公開授業を行い、めあてやふり返り、板書、発問、ICTの活用などとよりの授業の進め方について意見を交換して学びあうことができた。異学年での意見交換や教材・指導法等に関する情報交換が活発に行うことができた。今後も授業力UP5を活用した授業改善に取り組んでいきたい。 ・図書館利用状況は、11月末において総貸出数は4574冊であった。図書巡回指導員や読み聞かせボランティアさんの活用により読書活動を活性化できている。</p>		
ICTの活用	<p>①効果的なICT活用を目指し、教師のスキルアップのための研修会を実施する。 【指標】研修を通して効果的な活用方法や、今後の具体的方策を見出す。 【目標値】研修会を各学期1回以上実施。</p> <p>②授業において、学びの質を上げるためのICT活用を推進する。 【指標】効果的な場面や方法等について教師自身が学び、児童が使えるようにする。 【目標値】毎日1回以上、児童の端末利用。</p>	<p>・ICTの効率活用は、教師側が個々人で研鑽し、スキルアップが必要。 ・必要不可欠な教育手法ですが、デメリットもある。想定できるデメリットについては、事前に対策を講じていただきたい。 ・オンライン授業や家での活用など学べる場が広がったのが良かった。家庭とのやり取りにもっと活用してもらえると先生の業務改善にもつながる。 ・長期休みの度にPCの使用レベルがアップしており驚かされる。ただ、操作が困難なところや上手く画面が機能しない等、本人たちでは解決できないことがあり、システムの改善や子どもたちが学習しやすい工夫が必要。 ・ICTに関して、子供に任せるのが一番良いと思う。書く・読む・調べるを自分の力でできない低学年に与えることについては慎重に検討してほしい。 ・これからは必要不可欠だが先生にとってはとても大変な作業ではないか。学年担任の枠を超えて各教科ごとに担当を決める等楽な方法で取り組んでください。 ・今や欠かせないICTの活用を、授業に遅れのある児童には上手く活用して勉強に興味を持たせてあげてほしい。不登校が続く子供達にはみんなと一緒に授業を家でも受けられる(受けていると思える)工夫をしてほしい。</p>	<p>・教職員一人ひとりが教材研究し、活用のスキルアップをしてきた。一人のスキルをみんなのスキルにしていくために、交流する機会を積極的に設けていく必要がある。研修会を開いて新しい技術や手法を学んだり、教職員各自の取組を交流しあったりする機会を今後も設け、積極的にICT活用を進めていく。 ・出席停止児童のオンライン授業活用は日常的になるつつある。不登校児童の学力保障としての利用も進めていきたい。</p>
	<p>(成果と課題) ・講師を招聘しての研修会や、ICT支援員を活用してのミニ研修会などを実施し、教職員のスキルアップをはかることができた。 ・学習および授業支援システム(ミライシードやGoogleクラスルーム、Jamボード等)を利用して、ドリル学習や写真の提出、考えの交流などを学年に応じてできるようになってきた。 ・低学年からローマ字入力に取り組み、短い文を入力できるようになってきた。高学年はローマ字入力に慣れてきて、入力速度が向上しつつある。 ・休み時間にパソコンを使ってタイピング練習やプログラミングに取り組み、スキルアップしている児童の姿が見られた。 ・日常的に文房具のように使えるようになるためには、今後も効果的な利用場面や教材等についての研究や研修が必要である。</p>		
不登校	<p>①クラスづくり・仲間づくりを進めて不登校の未然防止に努めるとともに、日常生活の様子が気になる児童の情報を職員間で共有し、早期対応を行っていく。 【指標】情報共有 【目標値】職員会議後には毎回、児童の情報共有の機会を持つ。</p> <p>②児童とつながる機会を確保する。 【指標】家庭訪問や学習会 【目標値】毎月1回は家庭訪問や学習支援の機会を持つ。</p>	<p>・不登校の子ども一人ひとりに合わせての登校や関わりの工夫を子どもの話から感じる。クラスの子どもたちは、その子自身の人を理解関わっているように思う。 ・先生たちはきめ細かく丁寧に対応されていると思う。 ・不登校に関して昔と比較すると、社会が寛容・豊かになったので、より個別対応ができるようになったと思う。 ・不登校になる児童の特徴等を把握し、未然防止に努めていただきたい。 ・根深い問題ですので、家庭と連携をとって良い方向に導いてください。 ・家庭との連絡を密に、時には同級生との野外活動の場を持たせる工夫をする。 ・不登校対応もT.Tで。たとえ相手が子供でも合う合わないが人間なのでどうしても出てくる。何も卑下する必要はない。 ・ICTの活用、(コロナ禍の時と同じように)授業風景を配信するとよい。 ・社会に問題があるところは、国レベルで基本方針を立てて対応していかなくてはならない。</p>	<p>・情報共有とは別に、各児童に対する個別の早期対応について話し合う場や時間をつくる。 ・状況によっては学校だけでの対応は難しい場合があるが、そのような際は保護者と関係機関をつないでいく。 ・学校全体で保護者や関係機関への教師の働きかけ方について研修し、共通認識していく。 ・早期に校内委員会を開き校内体制を整える等の対応を検討する。</p>
	<p>(成果と課題) ・職員会議後には必ず児童の情報共有の機会を持つことができ、対応について相談することができた。 ・不登校の児童に定期的に電話連絡や家庭訪問を行い、児童の様子を知ることができた。また、放課後に学習支援の機会を持つこともできた。学校に来られるようになった児童もいる。しかし、休みがちな児童は増加傾向にあるため、その背景を探る努力を続けていく必要がある。</p>		

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
地域連携	①鈴鹿型コミュニティスクールの推進 【指標】学校支援ボランティアの活用 【目標値】宿題チェックは毎日、読書は定期的、その他は各学期1回以上	・ボランティアの話は家でも聞く。図書ボランティアによるアニメーションは子どもたちに好評だった。 ・ボランティアに保護者が多数参加してくれている。非常に良い傾向である。 ・ボランティアの活動が教師の日常の助けになるよう有効に活用し成果をリターンしていったほしい。 ・コミュニティスクールの推進は地域全体の活性化につながる。地域連携の成果は出ていると思いますので継続してください。 ・地域コーディネーター、各種ボランティア員との横の連携が必要。ボランティア委員会の発足も今後必要になってくるのでは。 ・地域の行事が減ったままの中、工夫してくれていると思う。 ・ホームページに「地域連携」の欄を設定して、各ボランティア活動の紹介(いつ・どこで・何を)をしていただければ、地域はさらによく理解していただけたと思います。 ・ホームページの内容(学校だより)は充実しており、学校の情報がわかりやすく紹介されていますので、引き続き情報発信に努めていただきたい。	・ボランティアの効果的活用のため、授業前に教師との役割分担を打ち合わせを行うように意識づける。 ・各学年、ボランティアの活用が有効だった活動を職員間で共通理解できるようにする。 ・年間を通してボランティア内容と時期を示したリストを作り、全教職員が計画的また効果的にボランティアを活用できるようにする。 ・ホームページを閲覧してもらえるよう、学校だよりやメール配信などでボランティア活動を積極的に紹介する。
	②地域の人に児童の様子を知らせ、連携をはかる 【指標】学校行事や授業の地域の人への公開、教育活動の情報発信 【目標値】年間2回の行事や授業の公開 月2回以上、ホームページによる情報発信		
	(成果と課題) ・学校支援ボランティアでは、読み聞かせ、学習支援、宿題等のチェック作業、花壇の整備、登下校見守りという様々な立場からご支援いただいた。見守りボランティア、宿題等のチェック作業ボランティアは毎日、学習支援ボランティア、花壇のボランティアは適宜、読み聞かせボランティアは毎週、活動していただいた。学校生活や登下校の環境を整えたり、学習の支援する等、ボランティアの方の活動によって子どもたちが受けている恩恵は非常に大きい。保護者アンケートでも、ボランティアの活動の認知度はさらに高まり、非常に高い数値を示している(昨年度97%→今年度99%)。 ・ホームページには、さまざまな行事の様子や学校だよりなどのお知らせを発信したが、保護者アンケートでは、定期的に見聞している人の割合は昨年度と変わらず低い、閲覧したことがある保護者は75%で昨年度より8%増加した。		
人権教育	①仲間づくり、各学年のテーマに応じた取組、自尊感情の向上にむけて人権教育を推進する。 【指標】日々の学校生活や会議の中で、児童の様子について情報・意見交換をし、児童の理解・把握に努める。 【目標値】毎回の職員会議での児童実態の交流	・友だちとの違いや一人ひとりの良いところを知らせる取組等、学校でいろいろなことを学んおり、お互いを大切にする意識が高いと思う。 ・仲間を大切にする感情はしっかり子どもに根付いていると思う。ただ、個人差または年齢差で理解度や実践度が違うことに子どもたちは気づきにくい。それも同時に学ばせてほしい。 ・各学年に応じて教材の選択を吟味していただきたい。NHK教育番組を利用した意見交換ができる機会を作るとよい。 ・人権問題の具体的な実例を生徒に理解できるようにやさしく教える時間があってもよい。 ・子供にとってわかりやすく、興味を持ってもらえるような内容の授業となるように取り組んでいただきたいと思います。	・来年度も各学年の人権教育カリキュラムに基づき個別の人権課題に取り組む。 ・各クラスの人権課題解決のための仲間づくりに取り組んでいく。教師は、クラスにある人権課題を見抜く力をつける。 ・NHK for Schoolにある番組等を活用するなど、子どもたちにわかりやすく伝わるような手段を講じていく。
	②平和教育に取り組む。 【指標】各学年に応じた平和教材を用いて授業を行い、平和を大切にする気持ちを育てる。 【目標値】各学年、年に1つ以上の平和教材を用いた授業		
	(成果と課題) ・職員会議での情報共有に加え、仲間づくりについてレポートを書き、クラスの人権課題を見抜いたうえでの意図的な仲間づくりを目指した。保護者アンケート「学校は、仲間を大切にする態度の育成に取り組んでいるか」では、98%が肯定的な回答をしている。 ・自尊感情に関わる児童アンケート「自分にはよいところがあると思いますか」に肯定的な回答をする児童は、昨年度77%、今年度80%と微増している。しかし、否定的な回答が、各クラスに4、5人いるので、個別・クラス全体に対する手立てがさらに必要である。 ・保護者アンケート「子どもが自分自身のことを大切に思っていると感じますか」では、98%が肯定的な回答をしている。家庭が児童にとって安心できる居場所であることの表れと考えることもできるが、児童と保護者の感じ方にずれがあることについて今後も見守っていく必要がある。 ・各学年、戦争や平和に関する教材に丁寧に取り組んだ。ロシアによるウクライナへの軍事行動が進行中での取組となる今年度は、児童の心情に配慮する必要があった。		
生活指導	①いじめの防止・早期発見・解決に向けた組織的な取組 【指標】いじめについてのアンケート実施後のていねいな対応、学校全体での情報共有、保護者への啓発 【目標値】いじめについてのアンケートを学期に1回実施する、情報共有の機会を職員会議に位置付ける、学校だよりやホームページに三重県いじめ防止条例・栄小学校いじめ防止基本方針を載せる、児童会でいじめ防止強化月間に取り組む。	・挨拶や友達への優しい対応など子どもから聞く、先生が規範になってくれていると感じる。 ・保護者の協力は不可欠。心を割って話ができる環境づくりや日ごろからの対話・対応等、何かと制約が多く大変な教師の立場もある中、ご苦労様ですと声を大にして言いたい。 ・栄小は小さいいじめも報告するシステムができていると思う。このまま継続してください。 ・社会での弱者の問題も含めて考えるなど教育者がうまく導いてください。 ・目安箱など、みんなが自由に発言できたり討論できる場所を作り、先生に言いやすい取組が必要だと思う。 ・低学年のころからの指導、意識づけが大切。 ・児童会でいじめ標語作りの活動で、委員が理解できていないまま各クラスに説明しなければならなかったのととても困っていた時があった。子どもが理解できているか振り返りながら活動してほしい。 ・ノーメディア運動が家庭でメディアの使い方を話すいい機会になっている。自分で決めて自分で守るというスタイルがいいと思う。 ・ノーメディアに関して、各々の家庭のルールを決めてYoutubeやTV、ゲームをしていたり、良いことを書かなければと悩んだりすることもある中でのアンケートを疑問視する声もあるが、実際には生活習慣が崩れている子どももいるので、生活の見直しになり、良い活動だと思う。	・いじめについてのアンケートや日々の子どもたちの様子に気を配り、いじめの防止及び早期発見に努める。 ・児童について、保護者・地域の方・保護者間で丁寧に情報共有を行う。 ・児童会のあいさつ運動に加えて、日常生活での言葉づかい等に対して継続的に指導し、各クラスで取組を加える。 ・児童会活動について、児童の理解の度合いを教師が確認しながらわかりやすく指導をする意識を持つ等、より慎重に行っていく。 ・スマートフォンやインターネットの使用による生活習慣の崩れやネットモラル等について学ぶ機会をつくる。 ・学校のきまりについて、クラスや学校全体で指導していく頻度を増やす。 ・全校で日記に取り組む等、児童との話しやすい関係づくりに努める。
	②基本的生活習慣の定着 【指標】あいさつ運動、食育、健康教育、ノーメディア運動の推進 【目標値】あいさつ運動を実施する、各学年栄養教諭と担任による食育授業を計画・実施する、ノーメディア運動・家庭学習推進週間を中学校と合同で実施する(年3回)。		
	(成果と課題) ・いじめについてのアンケートの結果を見て、関係する児童へ聞き取りをして保護者と情報を共有したり、結果から見える学級の課題を明らかにして学級づくりに生かしたりした。 ・児童会のいじめ防止の運動は前期・後期に実施した。児童アンケートでは、ほぼ全ての児童が「いじめはいけない」と答えている。しかし、1割の児童が「学校が楽しくない」と答えており、「友だちと過ごすのが楽しい」という項目にも否定的な児童が数名いる。実際の生活では何らかの悩みを抱えている児童がおり、教師による実態把握と学級の仲間づくりが必要である。 ・児童会役員・代表委員中心にあいさつ運動に取り組んだ。アンケートでは児童・保護者の9割が「あいさつができています」と答えている。 ・ノーメディア運動の取組は、予定通り年3回実施。本校独自で2回実施できた。学校保健委員会ではゲームやSNSの利用等で生活が乱れがちという意見があった。 ・児童アンケートの早寝早起きの項目では、16%が否定的な回答であった。 ・食育授業では栄養教諭と打ち合わせを丁寧にし、健康に関する意識をもつ児童が増えた。		

評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
特別支援教育	①児童の実態把握と個別の支援計画・指導計画の作成 【指標】定期的に保護者と協議し、個別の支援計画・指導計画の立案と見直しを行う。 【目標値】支援計画は年に1回以上見直し、指導計画は学期ごとに作成する。	・人数が増え、先生方は大変だと思うが、丁寧に対応していただいている。支援学校に通う友達との交流の機会があったのもよかった。 ・子どもに合わせて手厚く関わったり見守ったりしていただいている。 ・みんな卑屈にならずのびのびと育っていると思う。教職員の成果だと思う。 ・やはり介助員増が必要である。 ・将来、障がいのある子どもが自立して社会に参加できるような支援をしていただきたいと思う。 ・今や10人に1人という何らかの支援がいる子供がいる状況に、小規模という栄小の特性を生かして教職員での情報共有を密にしていってほしい。特に、心身共に悩みを持った子は、自分で気付いているが人に相談出来ずにいる子もいるはず。勉強面、身体面においていつでも相談ができる場を作ってあげてほしい。	・協力学級で過ごす時間を大切に、ともに生活することで、支援学級の児童の理解を深める。 ・特別支援学級理解のための授業を進める。 ・支援学級籍の児童や支援を必要とする児童が増えている。限られた職員数の中で、どのような体制を組んで支援を行っていくかを考えていく。
	②教職員間での情報共有 【指標】情報共有を図ることで教職員全員で児童を見守る。 【目標値】特別支援教育の校内委員会を月1回行う。 毎月の職員会議で情報交換を行い、たより「あったか」を発行する。		
	(成果と課題) ・今年度は該当児童が増え、10人になったが、介助員に加え、専科の教員が特別支援学級の授業を担当することで、個々に応じた学習を進めている。今後さらに児童数が増える見込みであるため、どのように対応していくかが課題である。学級や介助員増の要望が必要である。 ・教職員の支援学級を参観する機会を設け、理解を図っていった。 ・教職員間での情報交換を月1回行い、児童の様子を常に把握し、共通の対応ができた。		
教職員の働き方改革	①時間外労働時間の削減 【指標】時間外労働時間【目標値】年間360時間超の職員0人、月平均1人あたり30時間以内	・効率化のためには業務作業項目の徹底的な分析を行い、まとめられるところは統一し、外部委託を含め、分担するものを一項目ずつ詰めていくことが必要だと思います。 ・道のりは遠いですが、この問題は、ICTの活用の深化で緩和される方向にあると思います。 ・教育者が目指していることについて共有し、子どもたちが不利益にならないよう検討の上、業務を精選して行ってください。 ・教職員の方々の努力に頭が下がります。 ・単級の学校への人員配置(増加)は難しく、子供の多様化により今後も一層、仕事が増えると思う。その中での休暇取得は取りにくいだろうが低学年、中学年、高学年の先生それぞれがタッグを組む等、休暇がとれる体制を作ってほしい。 ・定時退校日を多くしてもいいと思う。 ・目標を完全に達成することは難しいと思いますが、継続して取り組んでいただきたいと思っています。	・教科担任制の導入により、授業の持ち時間の削減を工夫する。 ・宿題等チェック作業の分担化、ICT活用による事務処理作業の簡略化を提案・実践していく。 ・業務支援員の活用例を紹介し、より一層の効果的な活用を促進する。 ・児童の安全面への配慮ができる場合には、他の教員に指導を任す等、休暇を取りやすい校内体制を整える。 ・業務の提案や授業の教材のデータを職員間で共有し、反省点をもとに修正を加える等、時間を有効に使う取り組みを強化する。 ・行事や各課題に対する取組等、教育のねらいを維持した上で、実施方法のさらなる見直しを行う。
	②年休取得の増加 【指標】年休・特休取得日数【目標値】年間22日以上		
	③定時退校日の設定と実行 【指標】定時退校状況【目標値】月2回の設定日の退校率90%以上 (成果と課題) ・留守番電話での退勤時間以降の対応、各自の退勤予定時刻の見える化、行事实施方法の見直し等により昨年度の時間外労働時間をほぼ維持できたが、事務処理作業や日々の授業の準備等で時間外労働をしなければならないのが課題である。 (時間外労働時間1月末の合計 昨年度222時間(9月オンライン授業)→今年度233時間) ・今年度は、昨年度に比べ休暇取得が1日増えた。 (休暇取得1月末の平均 昨年度19日→今年度20日) 20日のうち16日は夏季休業日に取得したものであり、授業日に取得は難しい。取りたいときに休暇がとれる体制づくりが課題ある。 ・定時退校設定日であっても、児童の取り組みの評価や翌日の準備は必要なため、教職員90%の実行は難しい。一方で、定時退行率が少し上昇した。仕事に優先順位をつけ、定時退行の意識をもつことが昨年度よりも定着してきたとみることができる(設定日の定時退校率 昨年度62%→今年度73%)。		